

程度副詞が名詞を修飾する中国語“很 X”構文の記述的研究
-日本語「X ぽい」との対照を通して-
Descriptive study of Chinese “*hen-X*” constructions (adverbs of degree
modifying nouns):
through contrast with Japanese “*X-poi*”-

楊 迪
YANG, Di

摘要

We conducted a case study on the Chinese “degree adverb + noun” structure, which still lacks extensive description in terms of its detailed meaning and usage. We attempted to classify the meanings of the “*hen-X*” construction and compared it with the Japanese “*X-poi*” construction. Thus, we clarified that, similar to “*X-poi*,” the Chinese “*hen-X*” construction also has the semantic usages of “characteristic,” “similarity,” “appropriateness,” and “containing.” However, there are differences between the two constructions when expressing a “characteristic.” The Chinese “*hen-X*” construction often employs words in a fixed derivational sense, which is not commonly observed in “*X-poi*.” When expressing “similarity,” the Japanese “*X-poi*” construction freely uses common nouns, while the name of a famous person with typical characteristics is more likely to be included in the Chinese “*hen-X*” construction. Furthermore, there are differences between the two languages regarding content desirability in the “containing” usage, and the Chinese “*hen-X*” construction struggles to express the presence of visible solid content. Additionally, it was revealed that the Chinese “*hen-X*” construction has an “evaluation giving” usage and the Japanese “*X-poi*” construction does not. To analyze the relationship between each usage, we adopted Miyake’s (2006) schema-based and prototype-based approaches. The “characteristic” usage, where the “*hen-X*” structure extracts some attribute from the following word, X, is considered this structure’s “prototypical meaning.” This is because the “*hen-X*” structure is typically used to extract attributes, and it is this construction’s prototypical meaning. This relationship is closely related to the fact that the “*hen-X*” structure typically involves attributive adjectives. From the “characteristic” usage, the construction extends to the usages of “evaluation assignment,” “similarity,” “appropriateness,” and “containing.” These usages are all considered the “schema meaning” of the “*hen-X*” construction, as they express some form of property or attribute. Similarly, the Japanese expression “*X-poi*” functions as an expression of “property/ attribute.”

キーワード：中国語 “很 X” 日本語 「X っぽい」 意味用法 構文的特徴 性質・属性

Keywords: Chinese “hen-X,” Japanese “X-*poi*,” meaning and usage, structural features, property/attribute

1. はじめに

伝統的な研究では中国語の名詞は副詞の修飾を受けない（例 1）とされているが、以下のような表現（例 2）が日常会話では多用されている。

(1) *很勇气 [*とても勇氣] (cf. 很勇敢 [とても勇敢だ]) (朱德熙 1995 : 45)

(2) a. 很女人 [*すごく女性⁽¹⁾ / 女性っぽい]

b. (这道菜) 很油 [(この料理は) 油っぽい] (作例)

本研究では、『北京語言大学中国語言語コーパス(以下「BCC」)』から収集した実例を観察し、例 (2) のような中国語の「程度副詞＋名詞」構造⁽²⁾のケーススタディとして、“很” が名詞に前置される“很 X”の意味用法を記述する。中国語の“很＋名詞”構造は、名詞にある何らかの性質を抽出したり（例 2a）、主語に内在する物の含有量が多いことを表す（例 2b）。こうした意味機能は日本語の「名詞＋っぽい」に非常に近いいため、両表現の異同についても考察する。「(Y は) X っぽい」を記述した楊迪 (2022) の分類基準を参照し、“很 X”構造の意味分析に適応する。

2. 先行研究

2. 1. 中国語の「程度副詞＋名詞」構造に関する先行研究

中国語の「程度副詞＋名詞」構造に関する先行研究は数多くあるが（于根元 1991、邢福义 1997、施春宏 2001、邵敬敏・吴立红 2005、于克勤 2007、陆旭・温锁林 2019 等）、ここでは“很＋名詞”の意味・用法との関係で、邢福义 (1997) と陆旭・温锁林 (2019) を取り上げる。

邢福义 (1997 : 8) は、中国語には「「很淑女 [すごく淑女]」のような表現が存在しているものの、現代中国語では副詞は通常名詞を修飾しないのが原則である」(原文: 尽管存在“很淑女”之类说法, 但在通常情况下副词不修饰名词, 这仍是现代汉语里的一般规律) としている。

例 (3) のような例の場合、邢福义 (1997 : 4) は「このタイプの構文に入る典型的な名詞は、本来の意味ではなく、一種のアドホックに与えられた「異感(特殊な感受)」の意味で使われる」(原文: 典型名词进入这类结构, 用的不是本然意义, 而是一种临时赋予的“异感”意义) と述べている。

(3) 他长就一张很西藏的忠厚的脸。

[彼は*すごくチベットの／チベットっぽい忠厚な顔をしている。] (邢福义 1997: 2)

(4) 他的精神很好。[彼はとても元気が良い。]

他走起路来很精神。[彼は歩くときにとても元気だ。] (邢福义 1997: 4)

また、「“很 X”は形容詞を作るのに最適な構造パターンである」(原文：“很 X”是营造形容词的优化结构槽)とも指摘する(邢福义 1997: 9)。ある名詞が臨時にこの構造パターンに入る場合は単なる名詞の流用現象である。一方、この構造パターンに入る頻度が高くなると、品詞の分裂現象が起こる。つまり、例(4)のように名詞をもとに形容詞の品詞性が分裂してくるのであるとする(邢福义 1997: 4)。このように、邢福义(1997)は“很 X”構造に入る名詞の品詞性とその名詞の意味について論じているが、例(2b)のような本来の意味でこの構造に入る名詞が使われる用例については考察されていない。

陆旭・温锁林(2019: 100)は、「中国語にはいわゆる「程度副詞＋名詞」の現象は存在しない」(原文：汉语中并不存在所谓的“副(程度)＋名”现象)と主張している。「程度副詞＋X」構造における「X」は事物を指すのではなく、この名詞が指している事物の性質を表しているのであるとする。これは一種の性状範疇であり、いわばこの構造の中の名詞は形容詞としての使用と認識されていると述べる。

陆旭・温锁林(2019)は「程度副詞＋名詞」のいくつかの表現を考察しているが、その考察には不十分な点が見られる。例えば、例(5)について、“太农民”における“农民”を“土气的、朴实的[やぼったい、素朴な]”という性質的側面を抽出しながら、それと並んでいる“太中年人”については何も言及していない。ここの“太中年人”は単なる一つの形容詞で性質的側面を解釈することは難しいからだと考えられる。また、例(6)における「X」の意味に関する解釈(“像阿 Q 似的”[阿 Q に似ている])は、他の例、例えば例(5)の“农民”の意味＝“土气的、朴实的[やぼったい、素朴な]”とはやや異質であると思われる。

(5) 烧酒太中年人，日式米酒太农民。

[烧酎はあまりにも中年っぽく、日本式米酒はあまりにも農民っぽい]

(6) 这种想法有点阿 Q。[こういう考え方は少し阿 Qっぽい]

(陆旭・温锁林 2019: 105)

このように、先行研究では後続する名詞の意味解釈について丁寧な分類や考察がされておらず、異なる解釈のものが同一視されている。中国語における「程度副詞＋名詞」構造についての議論は長らく続けられているが、明確な意味用法の記述はまだ見られない。

2. 2. 日本語の「～っぽい」に関する先行研究

ここでは、話し言葉を対象にし、「～っぽい」の用法全般について記述した楊迪（2022）を紹介する。楊迪（2022）は「～っぽい」が形容詞性接尾語として使用される場合を「性質・属性用法」、助動詞として用いられる場合を「モダリティ用法」と呼んでいる。「名詞+っぽい」構造は基本的に「性質・属性用法」に該当するため、ここでは「性質・属性用法」のみ取り上げる。その下位分類として、以下の「含有」「傾向」「特性」「類似」「ふさわしさ」の5つがあるとし、各用法を支える構文パターンについて分析した。以下の例では、主語 Y に波下線、「～っぽい」の前接語 X に下線を施す。

- 含有：この部屋の空気は埃っぽい。 (楊迪 2022：38)
- 傾向：母は忘れっぽい。 (同：38)
- 特性：①千秋は幼稚っぽい。 (同：38)
- ②さんぴん茶は沖縄っぽい。 (同：42)
- ③ (ズボンについて) こうだぼっとしすぎなのは、今年っぽい。 (同：43)
- 類似：①ペプシの方が少し薬っぽい味がします。 (同：38)
- ②この白はちょっとグレーっぽい。 (同：44)
- ふさわしさ：このコートは夏樹っぽい。 (同：38)

以上からわかるように、「傾向」用法では「～っぽい」の前接語が動詞連用形で、「特性」①では形容詞・形容動詞語幹である。本研究は中国語の「程度副詞+名詞」構造と対照するため、「傾向」と「特性」①以外の、前接語が名詞である用法のみを考察対象にする。

本研究は、話し言葉を研究対象にした楊迪（2022）を参照し、日本語の「～っぽい」表現と対照しながら、中国語の「很+名詞（以下“很 X”）」構造の各意味用法を支える構文パターンについて記述し、各意味用法の特徴を明らかにしていく。

3. 研究対象

コーパス「BCC」を使用し、“很 N”をキーにして検索した結果、各ジャンルにおける出現数はそれぞれ「対話」29470例（総字数約6億字）、「文学」2153例（総字数約30億字）、「新聞」5576例（総字数約20億字）、「古代中国語」0例（総字数約20億字）であった。“很 X（=名詞）”は文学や新聞でも使われるが、話し言葉で圧倒的に多用されている。また、日本語の表現「Xっぽい」にも同じ傾向が見られる（楊迪 2022）。これは、話し言葉において、対象の様態を表す表現が多用され、新しい表現が常に好まれるからではないかと考えられる。両表現の対照研究の便宜上、本研究では「対話」ジャンルにおける“很 X（=名詞）”の用例1万例を考察対象

とした。以下の例文で、特に出典が明記されていないものは全て「BCC」の用例である。

4. “很 + 名詞” 構造の構文タイプ

先行研究で指摘されているように、名詞は“很 X”に入ることによって、名詞の持つ性状義（「性質・状態的意味側面」）が喚起される。同様に、日本語の「～っぽい」も名詞の性状義を引き出していると考えられるが、日本語では、名詞に「～っぽい」という形容詞性接尾語を付けて「X っぽい」という形態論的な形で形容詞を作る。これに対し、中国語は、典型的に形容詞が入るべき構造「程度副詞+X」に名詞を用いることで、名詞の性質・状態性を引き出しているのだと考えられる。

本研究では、楊迪（2022）の分類を参考にしながら、「BCC」から抽出した用例を観察し、改めて分類基準を立てた上で、次のように“很 X”の構文を5つに分類した。“很”の後続語を X、“很 X”が表している特徴を持つ語を Y と表記する。

特性：倩宝的坐姿依然很爷们。[倩ちゃんの座り姿は相変わらず男っぽい。]

評価付与：你弟弟的裤子很个性。[弟さんのズボンは個性的だ。]

類似：这个搞笑艺人很沈腾。[このお笑い芸人は沈騰さんっぽい。]（作例）

ふさわしさ：这条牛仔裤很小李。[このジーパンは李さんっぽい。]（作例）

含有：（这个桃子）不脆不过很水。[（この桃は）歯ごたえはないけどみずみずしい。]

これらの文内における位置（ポジション）を見ると、「特性」用法では、“Y 很 X”という位置で多用されるものの、連体修飾である“很 X 的 Y”の使用も少ないながら確認された。連体修飾というのは名詞を修飾することが本質的な働きであるため、「特性」の意味と機能が合致しているのだと考えられる。これに対し、「評価付与」「類似」「ふさわしさ」「含有」用法では、“很 X 的 Y”の使用はほぼなく、ほとんどが“Y 很 X”という述語位置で用いられている。述語位置は、陳述的な判断を述べるのが本質的機能であり、“很 X”の場合は評価性の判断を述べることになるのだと考えられる。そのほか、于克勤（2007）で述べられているように、「程度副詞+名詞」形式は文の中で状況語（副詞性修飾語）や補語として現れることもある。副詞性修飾語（状況語）として機能する場合を X と Y で示すと、“Y 很 X 地+V（動詞）”（例：他很哲理地说 [彼は哲学的に言った]（同：46））という形式になり、補語として用いられる場合は“Y+V 得+很 X”（例：你们俩人穿得很情侣 [お二人の格好はカップルっぽい]（同：47））となる。なお、最も名詞らしい機能である「主語」の位置に現れる例はほぼない。このように、“很 X”は文中で主に述語として用いられ、ほかには連体修飾語（限定語）、副詞性修飾語（状況語）、補語というさまざまなポジションで現れることが観察された。いずれも形容詞が本来用

いられるような位置で用いられている。

以下、上で示した順に、その意味と構造の特徴を記述していく。例文における“很 X”とそれに対応する日本語訳を網掛けで示す。

4. 1. 特性

「特性」とは「Y には X という性質・属性（または X にある性質・属性）が顕著に現れている」ことを表す（楊迪 2022：40）。“很 X”構造が「特性」を表す場合、その構文パターンは以下のものであると考えられる。

構文パターン：主語 Y + 很 + 性質を表す名詞 X

很 + 性質を表す名詞 X + 的 + 被修飾語 Y

この構文パターンに現れる主語 Y は人やものなどの具体名詞や出来事が多く、“勇气、条件”など抽象度の高い名詞は出現しにくい。「特性」を表す場合、“很 X”構造の名詞は、「社会一般にステレオタイプの特徴が共有された名詞」、「派生的意味を表す名詞」、「季節や年中行事を表す名詞」という 3 つに下位分類できる⁽³⁾。

社会一般にステレオタイプの特徴が共有された名詞（性質を表す名詞 I 類）⁽⁴⁾

①ステレオタイプの特徴を持つ名詞（主に具体名詞）：

男人、学生、市井、川菜、中国、模范、经典、など

②修飾成分を含む名詞（やや抽象度の高い名詞が多い）：

淑女、美味、悲剧、温情、苦命、噩梦、诗意、など

(7) 倩宝的坐姿依然很爷们。[倩ちゃんの座り姿は相変わらず男っぽい。]

(8) 这个员工餐一看就很川菜。[このスタッフミールは一見したところ四川料理っぽい。]

(9) 主动说话，她也不会理你的时候就很悲剧了。

[積極的に話しかけても彼女から相手にされないのは悲劇的だ。]

このタイプに現れる名詞のもつ性質・状態の意味は、社会一般にステレオタイプとして共有されている。“川菜 [四川料理]”は有名で顕著な特徴を持つためこの構造に入りやすいが、人々の共通認識が低い料理名であると、その名詞の性質を抽出しにくいいため、“很 X”に現れにくいと思われる。先に挙げた例 (3) でも、“很西藏的忠厚的脸 (邢福义 1997)”における“西藏 [チベット]”の本来の意味は地名であるが、“很西藏 [*すごくチベット/チベットっぽい]”と表現する際にはチベットに関するある種の顔立ちや気質、さらに飾り等の特徴などを指すようになる。中国語の“很 X”構造はこれらの名詞の属性面を引き出すことで、ステレオタイプのイメージを引き出す働きを持つと考えられる。“很 X”構造に入る名詞は、程度副詞との関係性の中でその名詞の性状義が引き出されるのである⁽⁵⁾。

これと類似し、日本語「～っぽい」もまた、「次女は本当に子供っぽい」、「さんぴん茶は沖縄っぽい」などのように前接語のステレオタイプを引き出す役割を果たしている。

一方で、次のような“很 X”構造に入る名詞が表現しているのは、いずれもその名詞の本義でも性状義でもなく、この名詞からの派生義である。志波（2022：132）が述べるように、このような名詞の派生義が定着したのは、「繰り返される使用によって抽象化・一般化され、社会慣習的な」意味用法として存在するようになったためだと考えられる。このような場合の名詞は、臨時的・一次的に“很 X”構造に用いられているのではないと考えられる。

派生的意味を表す名詞（性質を表す名詞 II 類）

垃圾、水、奇葩、菜鸟、绿茶、潮流、阳光、など

(10) 这个手机的质量很垃圾。[この機種の品質は*ごみっぽい／ごみのようだ／悪い。]

(11) 我们答辩很水的，报告也很水。

[うちの卒論の口述試験も報告も*水っぽい／難易度が低い。]

(12) 试讲时考官没问很奇葩的问题吧。[オーディションで試験官が*珍しい花（奇葩）っぽい／変な質問をしたわけではないですよね？]

“垃圾”は「廃棄物」という本義から、「利用価値のないもの」という性状義へ、さらに例(10)における「(品質、内容、能力や人格などが)良くないこと」のような派生義へ変化してきたのであろう。同様に、例(11)における“很水”の主語 Y と“水”は物質的包含関係にはないため、後述の「含有」用法と明らかに区別される。含有用法の例(27)「この牛乳は水っぽい」のような「望ましい内容物の含有量が少ない」という意味から、「(本などの)内容が充実していない、(試験などの)難易度が低い、(人の)能力が高くない」という派生義に変化している。また、例(12)の“奇葩”は、本来「珍しい花」を指しているが、現在では派生的に「通常の考え方からは逸脱した行動や考え」を表し多用されている。このほか、“阳光”“绿茶”“菜鸟”“潮流”など、“很 X”構造に入ることによって名詞の派生的性状義が喚起される用例が数多くある。陸旭・温鎖林（2019）でも、“阳光”という名詞が繰り返される使用によって既に「日の光」という物事を表す名詞から、「(人が)健康で朗らかだ」という意味や「(物事が)公開されている」ことを表す形容詞に分裂してきていることが述べられている。しかし、“阳光”以外の、名詞のこうした意味拡張については、先行研究ではあまり考察されていないようである。中国語の“很 X”にはこの種の意味拡張が多く観察されると言える。

一方、日本語の場合、「芋っぽい」という表現は上の例と同様に、芋の外見から「垢抜けない様子」という派生義を持っている。しかし、こうした意味拡張は限られており、中国語の“很 X”ほど生産的ではない。

季節や年中行事を表す名詞（性質を表す名詞Ⅲ類）

春天、夏天、秋天、冬天、圣诞、情人节、など

(13) 还有不到一个月立春了你刚入冬。

[あと一ヶ月で立春になるのに、あなた（の服装）は冬に入ったばかりのようだ。]

不过明天气温回升，很春天。[でも明日気温は再び上がるようで、春っぽい感じだ。]

(14) 薄荷绿很夏天。[ミントグリーンは夏っぽい。]

(15) 这红色的鞋子很圣诞。[この赤い靴はクリスマスっぽい。]

心情也是很圣诞呢～[気分もクリスマスっぽいよ～]

邢福义（1997）は、時間名詞は人に特殊な感受（いわゆる「異感」）を与えにくいため、“很 X” 構造に入ることが最も制限されているとしている。また、“很今天 [*今日っぽい] / 很明年 [*来年っぽい] / 很星期日 [*日曜日っぽい]” は不自然だと指摘している。“今年、现在、过去” などのようなその語自身の語彙的な意味に顕著な特徴があるとは言えない名詞は、“很 X” 構造に馴染まないのだと考えられる。

このように、時間名詞は本来“很 X” の要素になりにくいのが、季節・行事名詞であれば“很 X” 構造に用いられることが上の例からわかる。例（13）の主語は天気・気温であり、“很 X” 構造に入る語は“春天、夏天、秋天、冬天”に限られる。季節には、その季節特有の天気・気温といった性質を読み取りやすい。また、例（14）（15）は「特性」と後述の「ふさわしさ」の中間的な用法だと考えられる。Y には X という季節や年中行事の特徴が顕著であると解釈すれば「特性」用法であるし、Y は X という季節や年中行事にふさわしいと解釈すれば、後述する「ふさわしさ」用法となる。

日本語では「今年っぽい / 今っぽい / 昔っぽい」のような表現はかなり定着している。これは、日本語では「主語 Y ハ 時間名詞 X ポイ」という構造において、他の要素との関係性の中で「顕著な特徴」という意味が引き出される」（楊迪 2022 : 42）からだと考えられる。中国語では、こうした名詞の代わりに、“很时尚 [*ファッションっぽい / 流行りっぽい]” “很过时 [時代遅れっぽい / 流行りっぽくない]” という形容詞表現が使われる。

4. 2. 評価付与

「評価付与」とは、「Y は X という何らかの価値のある性質を持つ」ことを表すタイプである。このタイプは“很有 X” の“有”を省略したものと考えられる。贺阳（1994）では“程度副詞 + 有 + 名詞”構造に入る名詞に“个性”“情绪”などが挙げられている。これらは“很 X”構造にも入るが、“很 X”構造を対象にする先行研究ではこのタイプには言及されていない。

構文パターン：主語 Y + 很（有） + 性質を表す抽象名詞 X

この構文パターンに入る名詞は基本的に抽象名詞で、人や物事がある種の性質を持つことを

表す。下記の3例以外に、“很性格 [とても個性的]、很速度 [とても速度が速い]、很文化气息 [とても文化的雰囲気に富む]”などもよく見られる。これらの抽象名詞自身は評価性を持たないが、“很 X”構造に入ることである種の評価性を持つようになる。

(16) 你脸本来就**不大哇**～**中分很(有)气质**～

[あなたは顔もともと大きくないから、真ん中分けて**とても上品だ**/***気質**っぽい。]

(17) **你弟弟的裤子很(有)个性**，我一下就记得了。

[弟さんのズボンは**とても個性的**だったので/***個性**っぽい、すぐに覚えましたよ。]

(18) **你会不会也是当下很(有)情绪很郁闷**！可以为了很小一件事就心情不好。[あなたも今**とても感情的**になって/***気持ち**っぽく落ち込んでいるのでしょうか！とても小さなことで機嫌が悪くなることもある。]

いずれも“很 X”構造に入ることによって、例(16)の“气质 [気質]”は「上品だ」のようなプラスの意味になるが、例(18)の“情绪 [気持ち]”は「不愉快な感情」というマイナスの意味になる。一方、例(17)の“个性 [個性]”は文脈によって、プラスやマイナスの評価になる。この用法は日本語の「X っぽい」には見られない。

4. 3. 類似

「類似」用法は「人 Y には、本来別人である X の属性と類似点がある」という意味を表す。構造的には、X と主語 Y は別人であるという特徴がある。また、“很像 X”のように類似を表す“像”を加えても意味が変わらないという点も、他と区別される特徴である。

構文パターン：**ヒト Y + 很(像) + 別人を表す名詞 X**

この構文パターンに入る典型的な名詞 X は、社会的にステレオタイプが共有されている特定の人(典型的に有名な人)を表す名詞である。この X が固有名詞であると、“很 + 固有名詞”により主語 Y が別人物 X に似ているという意味が表れる。

(19) **秋妹最近很林黛玉**。[秋さんは最近**林黛玉**っぽい。]

(20) **这个(不知道什么名字的)搞笑艺人很沈腾**。 (作例)

[この(名前の知らない)お笑い芸人は**沈騰**さんっぽい。]

(21) (电视主持人) **昕姐今天很学生很美丽**。 (作例)

[(テレビ番組の司会者である) 昕さんは今日**学生**っぽくてきれいだ。]

例(19)(20)では、主語 Y も名詞 X も特定の個人を指示する名詞である。そのため、例(19)では主語“秋妹”と文学作品『紅樓夢』の主要人物である“林黛玉”とは別人であること、ま

た、例（20）では主語が有名なお笑い芸人瀋騰さんとは別の人物であることがわかる。これにより、例（19）の主語“秋妹”は最近“林黛玉”のような性格になっている、例（20）では、主語 Y のパフォーマンスのスタイルが瀋騰さんに似ているという「類似」の意味が読み取れる。

一方、例（21）では、昕さんは学生ではないことが明らかであるため、「昕さん（の格好）は学生（の格好）に類似している」（類似）という解釈もできる。また同時に、「昕さん（の格好）には学生（の格好）の特徴が顕著である」（特性）と解釈すれば「特性」の意味となり、両者の中間的な例である。これは X が“学生”という普通名詞であることに起因する。典型的な「類似」とは X が特定の有名人で、かつ X と Y が別人物でありながら、両者に何らかの類似点があることを表す。一方、例（21）の主語“昕姐”と属性を表す“学生”はこのような関係が成り立たない（「特性」の例（7）も同様に、女性の“倩宝”は、属性を表す“爷们 [男性]”と別の個体ではない）。“学生”という名詞は、ステレオタイプの特徴を持つ普通名詞であることにより、「特性」の解釈を可能にしているのだと考えられる。同時に、例（21）のように X が Y ではないという前提があれば、「類似」の解釈が成立するのである。

このように、“很 X”構造が「類似」を表す場合は、典型的に特定の人を示す固有名詞が要素となる。日本語にも「タモリっぽい」のような固有名詞の例がある。一方、日本語の「X っぽい」は「ペプシは少し薬っぽい（味がする）」のような普通名詞が現れる例が多く、中国語の“很 X”より使用範囲が広い。中国語で普通名詞を用いて類似を表す場合は、“百事有点像药 [ペプシは少し薬っぽい / 薬みたいだ]”のように類似表現“像”を付加した方が自然だと考えられる。

そのほか、日本語では、「正確に表現しにくい色を形容するために」典型的な色に似ているという意味で、「黄色っぽい」のように「X っぽい」が多用される（楊迪 2022 : 44）。一方、中国語では“橘色（オレンジ色）”のような“O 色”の形式は名詞だが、話し言葉では“色”を除いて“很橘”のように“很 O”（O = 形容詞）とだけ述べる場合が多い。この場合は、「オレンジ色に似ている」という「類似」の意味は読み取りにくく、基本的にオレンジの色味の濃さについて述べる通常の形容詞の用法だと思われる。代わりに、“偏橘色”のような“偏 + O 色 [O 色に偏る]”という形式が多用されて類似色を描写する。

4. 4. ふさわしさ

楊迪（2022 : 44）では、「ふさわしさ」とは「Y の持つ性質・属性が X に似合う / ふさわしい」ことを表すため、名詞 X は特定のヒトを指す固有名詞である場合が多いと述べられている。前述の「類似」用法は Y も X も人であるが、「ふさわしさ」の場合は特定の人が X に現れるが、Y がモノである点で異なる。

「特性」用法の一部のものと「ふさわしさ」用法は、「いかにも～だ」という意味を共有しており、非常に似ている。両者の違いは、「特性」が社会一般的に共有されているイメージを引き出す用法であるのに対し、「ふさわしさ」とは話し手が聞き手に対し、特定の人や対象に対する

個人的なイメージを引き出して共有する働きをする。したがって、「ふさわしさ」は「特性」から派生した意味だと考えられる（楊迪 2022）。

構文パターン：**モノ Y+很+特定のヒトを指す名詞 X**

- (22) 这个礼物很夏树。[このプレゼントは夏樹っぽい。] (作例)
 (23) 这条牛仔褲很小李。[このジーンズは李さんっぽい。] (作例)
 (24) (这种五彩的)色调很少女。[(こういうカラフルな)色合いは少女っぽい。]

例(22)は“很适合小李[李さんに似合う]”に近い意味を表している。例(22)のような“夏樹”が受け取る側か贈る側かが不明な例では“很 X”構造が便利だと思われる。もし“夏樹”が受け取る側であれば、例(23)と同様に“很适合夏樹[夏樹に似合う]”に言い換えられる。贈る側であれば、例(22)のように“很夏樹”で表現するのが自然である。また、例(24)も中間例であり、「この色合いは少女に似合う」(ふさわしさ)とも、「この色合いは少女の持つ特徴が顕著に現れている」(特性)とも解釈できる。陸旭・温鎖林(2019:105)の例(5)に挙げた“烧酒太中年人, 日式米酒太农民[烧酎はあまりにも中年っぽく、日本式米酒はあまりにも農民っぽい]”という例も、中間的な例だと思われる。邢福义(1997)では、並列構造であるときに、並べられる要素の間には何らかの共通性がなければならないと指摘されている。ここでも“太中年人”と“太农民”という両表現は同じ意味の構文として並べられており、そこからは「…が好きそうな感じ、…にふさわしいイメージ」という解釈が導き出されると考えられる。

上の用例の日本語訳を見ればわかるように、日本語「~っぽい」の「ふさわしさ」の用法も同様に、主語 Y がモノゴトで、前接語 X が特定の人である場合は「ふさわしさ」の意味になる。

4. 5. 含有

「含有」とは「Y には X の含有量がある種の基準より多い」ことを表す（楊迪 2022:39）。主語 Y と“很”の後続語 X はいずれもモノ名詞であり、Y と X は全体と部分の関係でなければならない。

構文パターン：**モノ Y+很+Y に内在する成分・内容物を表すモノ X**

BCC で抽出した例を観察すると、中国語の“很 X”構造では、“很油[油っぽい/脂っぽい]”、“很水[水っぽい/みずみずしい]”、“很面[粉っぽい]”、“很灰[埃っぽい]”のような表現が多く見られる。そのほか、“很肉[*肉っぽい]”という例もある。こうした「含有」の意味の“很 X”用法についての分析は、先行研究には見られない。

- (25) 今晚的菜, 很辣, 很油, 有点咸。[今夜の料理、辛くて油っぽい、あと少ししょっぱい。]
 (26) 我是混油皮, 每天早上起来鼻子额头很油。

[私は混合肌で、毎朝起きると鼻とおでこが脂っぽい。]

(27) 这个牌子的奶味道很水。就是味道很淡。

[このブランドの牛乳の味は水っぽい。つまり味が薄い。]

(28) 怎么样。多半都已经不脆了吧～ [どう？ もう歯ごたえがないだろう。]

(这个桃子) 不脆不过很水。 [(この桃は) 歯ごたえはないけどみずみずしい。]

(29) 这个南瓜特别好吃，很面不会水塌塌。

[このカボチャはとてもおいしい、ほくほくしていて/*粉っぽくて水っぽくない。]

(30) 我现在都胖了一大圈了.. 虽然以前也很肉。

[私は今ずいぶん太ってきたの… 昔も太っていた/*肉っぽいけど。]

(31) A: (内蒙) 空气很不错哦。 B: 咱家很灰⁽⁶⁾吗。

[A: (内モンゴルの) 空気がいいね。 B: うちのほうが埃っぽいのか。]

例 (25) のように“很油”は料理に油の量が多いことに用いられるほか、例 (26) のような人の肌や髪に出ている皮脂が多いことを指す場合にも使われる。“很水”は「水っぽい」の意味 (例 27) にも、「みずみずしい」の意味 (例 28) にもなる。“很面”は例 (29) のようにカボチャのほくほくした食感を指す以外に、水分が少ないりんごを描写する際にもしばしば用いられる。さらに、例 (30) のように、体全体やある身体部位 (ほお、腕など) に肉の含有が多いときには、“很肉”が多用される。そのほか、“汉堡王可以说很肉了 [バーガーキング (のハンバーガー) は肉が多い/*肉っぽい]” のような例も見つかった。したがって、“很 X”は「含有」を表す際に、その含有量が望ましいかどうかは関係なく、「含有量の多さ」を単純に述べるのだと言える。

中国語の「含有」を表す“很 X”構造には“油、水、面、肉、灰”などのような名詞がしばしば現れることが窺えた。これに対し、楊迪 (2022) では、日本語「～ぽい」の「含有」における前接語 X は「油、脂、水、筋、粉、埃、骨」などの名詞に限られていると指摘されている。両言語には、例 (25) “很油”のように、日本語の「油っぽい」に完全に対応している場合もある。一方で、それ以外の表現は、形式上は類似しているが、実際の使用は異なるものが多い。

例えば、日本語の「脂っぽい」は食べるお肉に脂の含有量が多いときに多用されるのに対し、これに対応する中国語の“很油”は人の肌や髪に出ている皮脂が多いことを指す (例 26) のが一般的である。「お肉に脂の含有量が多い」ことを表現するには、中国語では“很肥”という表現がある。また、日本語の「水っぽい」は「みずみずしい」のマイナスの表現として使われるが、中国語の“很水”には両方の意味がある⁽⁷⁾。さらに、“很面⁽⁸⁾”はカボチャの優れた点であるため、「粉っぽい」には対応しない。以上から、「含有」を表す日本語の「～ぽい」表現はマイナス評価を含意し、その含有量の多さがあまり望ましくない意味であることがわかる。一方、中国語にはそうした意味の制約がない。

さらに、「筋っぽい」や「骨っぽい」に対応する中国語の“很 X”表現はない。その理由は、明らかに目で見える固体の含有物の存在には「含有」の意を表す“很 X”構造は使いにくく、“很多 X”で表現するほうが適切であるからだと考えられる。例えば、「この魚は骨っぽい」の中国語訳としては、“这个鱼很多刺”が自然である。「この部屋（の空気）は埃っぽい」の場合は中間的で、例(31)のように“很灰”が使える一方、“这个房间很多灰”も使える。これは埃が溜まっている量によって、目で見える場合と見えない場合があることに関係しているのだろう。“很多灰”のほうは明らかに目で見える程度の埃が溜まっているときに使いやすくなる。それに対し、例(31)は空気の清浄度についての話で、空気中の埃は目で見えにくいいため、“很灰”のほうが自然である。中国語の「含有」を表す“很 X”は、外見から含有が明らかである場合には使いにくいのにに対し、日本語の「X っぽい」にはこのような制限はない。

そのほか、日本語で「肉っぽい」という表現はあるが、「冷凍後の食感を肉っぽくするなら木綿豆腐がおすすめ！」のような主語 Y「豆腐」と前接語 X「肉」が別物である「類似」用法になる。よって、中国語の「肉の量が多い」ことを表す“很肉”とは異なる。以上からわかるように、「含有」における日本語の「X っぽい」は“很 X”よりマイナス評価を表す傾向があり、また、明らかに目で見える固体の含有物については、「X っぽい」は使えるが“很 X”は使いにくいなど、「含有」の用法については様々な細かい違いがあることが明らかになった。

5. 各用法間の関係性

前節では中国語“很 X”構造の意味用法およびそれぞれの意味用法を生み出す構文的特徴を分析した。ここでは各用法間の関係性について考察したい。

三宅(2006)は、多義形式における各用法の関係について分析するアプローチには、「スキーマに基づくアプローチ」および「プロトタイプに基づくアプローチ」という2つがあると述べている。「スキーマ」とは「全ての用法に共通する抽象的あるいは本質的な意味」(同:124)であり、「プロトタイプ」とは「それぞれの用法の中で、最も基本的あるいは原型的な」「拡張の始点となる用法」(同:125)である。「ただし、両者は矛盾しないので、両者を共存させたアプローチも可能である」(同:125)とする。本研究ではこのような方法論を援用して分析を行う。

中国語の“很 X”構造は、後続語 Xにある何らかの属性を抽出することを表す。本研究ではこれを「特性」用法と呼ぶが、これがこの構造の「プロトタイプの用法」だと考えられる。これは、“很 X”構造が本来「形容詞が入る最も典型的な文法構造である(原文:“副(程度)+X”は容納形容詞最典型的の句法槽)」(陆旭・温锁林 2019:100) ことに関係している。朱德熙(1995)は、中国語の形容詞は属性形容詞(大[大きい]、干净[清潔だ]など)と状態形容詞(干干净净[すっきり清潔である]、雪白[雪のように白い]など)の2種類に分かれると指摘している。程度副詞で修飾できるのは典型的に属性形容詞である(很大[とても大きい]、很干净[とても

清潔だ])。状態形容詞の場合、“干干净净”は完全な清潔状態を表し、“雪白”は完全な白を表すため、程度性がなく、程度副詞で修飾しにくい(*很干干净净[*とても完全に清潔である]、*很雪白[*とても完全な白])のだと考えられる。よって、“很 X”構造は典型的に属性形容詞が入る構造であると言えるだろう。

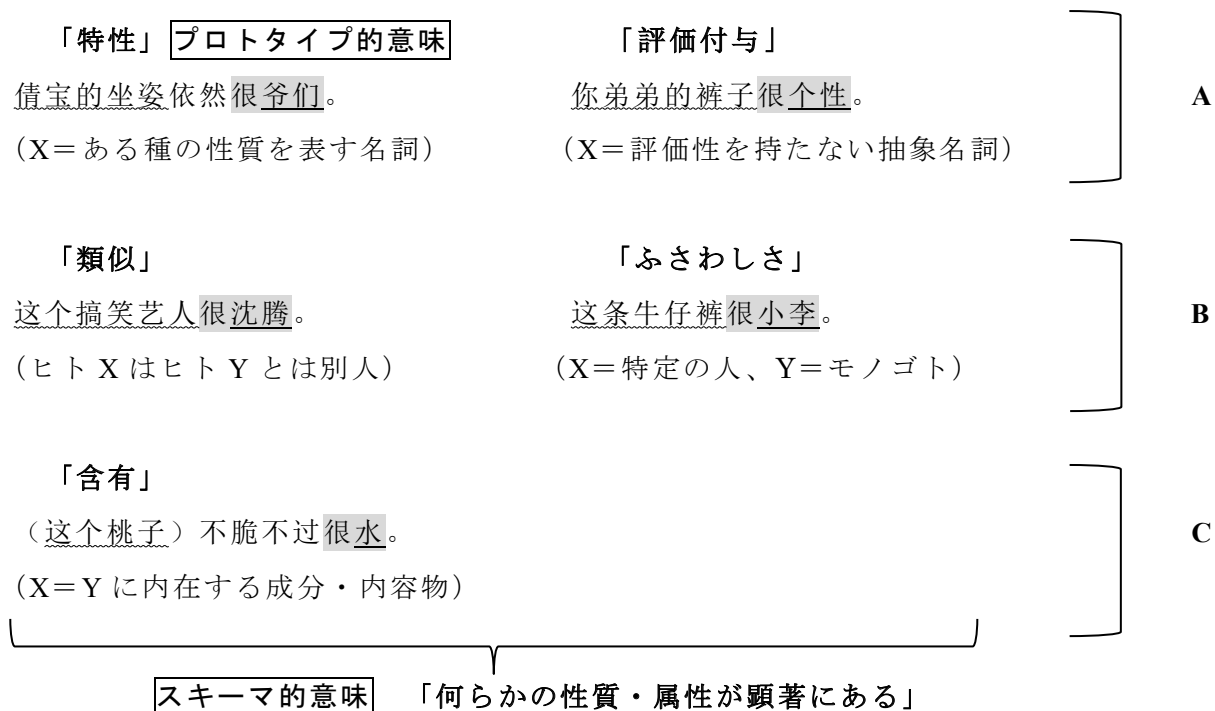


図1 “Y 很 X” 構造各用法間の関係性

“很 X”構造に名詞が用いられる場合は、プロトタイプの用法である「特性」用法に、評価の意味が加わることで「評価付与」の用法になる。属性を表す抽象名詞(“气质[気質]”等)が“很 X”構造に入る場合、“很”は程度性が高いことを表すことによって、本来評価性を持たない語は中立でなくなり(“很气质[気質が良い/上品だ]”という意味になる)、プラスかマイナスの評価性を持つようになる(図のAの領域)。また、「類似」用法では、典型的に“很 X”構造に入るのは「特性」用法に入る名詞I類と同様に「社会的にステレオタイプが共有されている名詞」である。一方で、「特定の人を表す名詞」に限られるのが、「類似」の特徴である。

「特性」と「類似」は、社会一般に共有されたステレオタイプの特徴が“很 X”構造によって抽出される点で共通しているが、「類似」用法では「ヒト主語 Y ≠ (典型的に有名な) 特定のヒト X」という関係が重要となる。さらに、「ふさわしさ」という用法もモノゴト主語 Y と特定のヒト X の間にある関係性により生まれる意味であり(図のBの領域)、モノゴト主語 Y にある特性は特定のヒト X の好みと照らし合わせた結果、モノゴト Y は特定の人 X が好みそうな性質を持っているという解釈を得るのだと言える。最後に、「含有」用法は前述の4つの用法と

やや異質に見えるが、含有量が多いのも程度性が高いこと（程度副詞である“很”の働きによる意味）の一側面であると考えられる（図の C の領域）。Y に X の含有量が多い、ということは、Y に X の特性が多い（目立つ）ということとつながっているため、性質の一種でもあると思われる。これを図式化すると図 1 のようになる。

以上からわかるように、“Y 很 X”構造のスキーマ的意味は主語 Y にある何らかの性質・属性が顕著であることを表すことである。このような性質・属性を表す場合には、程度副詞“很”の働きによるもの（「特性」「評価付与」）と、“很”の働きおよび Y と X の関係性が作用するもの（「類似」「ふさわしさ」「含有」）がある。

6. おわりに

本稿は、日本語の「X ばい」と対照しながら、中国語の“很 X”構文について考察した。その結果、「X ばい」と同様に、中国語の“很 X”構文も「特性」、「類似」、「ふさわしさ」と「含有」の意味用法があることが明らかになった。しかし、両言語の表現には相違点もあった。「特性」を表す場合、中国語の“很 X”構文では固定的に派生義で用いられる語（“垃圾、奇葩”等）が多いのに対し、日本語にはこうした派生義の使用はほとんどない。また、中国語では「今、昔」のようなその語自身の語彙的な意味に顕著な特徴がない時間名詞は“很 X”構文には使いにくい。「類似」の場合、日本語の「X ばい」には普通名詞が自由に使われるが、“很 X”構文には典型的な特徴を持つ有名な人物の名前のみが現れやすい。「含有」にも含有量の望ましさについて両言語には違いがあり、さらに、目で見える固体の含有物の存在である場合は“很 X”構文は使いにくい。そのほか、中国語の“很 X”構文には、日本語の「X ばい」にはない「評価付与」用法があることも述べた。

中国語の“很 X”構造のプロトタイプ的意味は「特性」であり、スキーマ的意味は主語 Y に何らかの「性質・属性がある」という意味である。これは、日本語の「X ばい」も同様である。一方で、中国語の“很 X”構造に「評価付与」用法があるのは、中国語には“很（有）X”という構造があるためであると考えられる。この構造から“有”が省略され、“很 X”構造で他の意味タイプと異なる「評価付与」用法が生まれたものと考えられる。

最後に、「X ばい」のほかに、一部の中国語“很 X”構造は日本語の「X 的」という表現にも対応することが観察された。特に「～ばい」にはない「評価付与」用法は、「X 的」に対応しやすいようである（例 17、18）。こうした対応関係については、今後の課題とする。

注

- (1) 例 (2) や例 (3) は「すごく女性的な」「チベットの」等の方が日本語として自然であるが、本稿では中国語の構造を重視して「すごく女性」「すごくチベットの」のように訳す。

- (2) 志波 (2022: 33) によれば、「構造」とは「2 つ以上の要素の間の有機的な関係の秩序のこと」であり、「構文」とは「2 つ以上の要素と構造からなる全体としての構成体。くり返される使用によって慣習化され、抽象化・一般化されたパターンとして社会慣習的に実在する」ものである。本研究はこの定義に従い、“很+名詞”のような2要素間の関係の秩序を「構造」と呼び、要素と構造によって組み立てられた全体の構成体を「構文」と呼ぶ。
- (3) ただし、各下位分類は截然と分けられるわけではない。例えば、“淑女”は修飾成分を含む名詞であるが、典型的特徴によってカテゴリー化されたものでもある。
- (4) 最も性状義を引き出しやすいⅠ類、“很 X”構造で固定的に派生的意味を表すⅡ類、そして、「ふさわしさ」と領域が重なってくるⅢ類の順に並べた。
- (5) 志波 (2022: 134) では、構造の本質は「関係性」とであると述べ、このような構造と要素の関係について、「各語 (各要素) の意味は、他の共起する要素との関係性の中で、その語の語彙的な意味の中の一つが引き出されてくる」と指摘されている。
- (6) “很灰”という表現は地域や話者によって許容度にゆれがある。
- (7) さらに、“很水”は「含有」のほかに、先述した派生義の「特性」も表せる。派生義で用いられる“很水”は「含有」の「水っぽい」という意味から拡張し、マイナスの意味を表す「含有」より多く使われている。一方、「含有」を表す際には、「水っぽい」よりは「みずみずしい」というプラスの意味の方が多用される。
- (8) 地域や話者によっては、“很粉”と表現することもある。

参考文献

- 于克勤 2007 「いわゆる改革開放の時期における中国語新語・流行語に関する考察：新語「副詞+名詞」という表現を中心として」『聖母女学院短期大学研究紀要(マタイス・アンセルモ学長 岸部公子教授退休記念号)』第36号, 37-51頁。
- 三宅知宏 2006 「「実証的判断」が表される諸形式—ヨウダ・ラシイをめぐる—」『日本語文法の新地平2 文論編』くろしお出版, 119-136頁。
- 志波彩子 2022 「日本語の他動性構文論の記述を目指して—奥田靖雄構文理論の継承と発展—」『名古屋大学人文学研究論集』第5号, 127-147頁。
- 朱德熙(著)/杉村博文・木村英樹(訳) 1995 『文法講義 朱德熙教授の中国語文法要説』白帝社。
- 楊迪 2022 「「～っぽい」の意味・用法と構造的特徴に関する記述的研究」『東アジア日本学研究』第8号, 35-50頁。
- 贺阳 1994 <“程度副詞+有+名”试析>《汉语学习》第2期, 22-24頁。
- 陆旭・温锁林 2019 <关于“副(程度)+名”现象的思考>《语言研究集刊》第2期, 99-113頁。
- 邵敬敏・吴立红 2005 <“副+名”组合与语义指向新品种>《语言教学与研究》第6期, 12-22頁。
- 施春宏 2001 <名词的描述性语义特征与副名组合的可能性>《中国语文》第3期, 212-224頁。
- 邢福义 1997 <“很淑女”之类说法语言文化背景的思考>《语言研究》第2期, 1-10頁。
- 于根元 1991 <副+名>《语文建设》第1期, 19-22頁。
- 用例出典：**
- 北京語言大学中国語言語コーパス (BCC)
- 荀恩东・饶高琦・肖晓悦・臧娇娇 2016 <大数据背景下 BCC 语料库的研制>《语料库语言学》第1期, 93-109頁。